

宝の海から

白浜で出会ったさまざまな貝殻の宝

54

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

番所崎に524種の貝殻

京都大学瀬戸臨海実験所近くの北浜を中心として、この7年間に打ち上げられた貝殻は524種類にもなる。その数は予想以上に多く、今までカウントされていなかった微小な貝も入ると、いったい何種になるのだろうか。

ムガイが漂着した記録がある。オウムガイより小形だが、同じような生活を送るタコブネの貝殻は最近数個体を発見した。陸生や淡水の貝類も打ち上がる。それは、瀬戸臨海実験所構内に生息するカタツムリ類が主なものである。この他、稲へ雪で知られる帰化種のジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)の漂着が、サザエなどもある。大きなマガキの貝殻も食用に

がすべにこまごまになってしまふとは思われないので、どうして打ち上げ物の中で見つからないのか不思議である。一方、明らかに食用とされた後で捨てられたホタテガイや、自生しないタテガイ、自生しないが釣り餌や食用になったサザエなどもある。大きなマガキの貝殻も食用に

流れていないオウケビレガイという地中海沿岸原産のカタツムリの一種の打ち上げ例もある。オウケビレガイがどこから流れてきたのか不明のままだが、これも同誌44巻(2002年)にカタツムリ類の専門家である白浜町在住の湊宏先生や貝類に詳しい土生紳吾さんと一緒に報告している。

世界の貝類に詳しい和歌山市在住の小山安生先生が、北浜周辺の貝類に

ついて、最終的にすべて同定して下さる。貝類のような大きな分類群で、生き字引なのである。524種類を記録したリストは、小山先生と共著で南紀生物誌44巻(2002年)に1,2号にまと

らなで北限記録となる

たがってまとめられた。表にその内訳を示したが、巻貝類が圧倒的に多く381種類、次が二枚貝類で133種類である。これらの貝の中には、41回で紹介したホシタカラガイのように、日本北限を記録した種もいくつかあった。たった1個体だけの打ち上げだった

が、日本新記録種の巻貝もあったこと、小山先生は南紀生物誌の最新の巻でもなく報告されること、楽しみである。北浜に打ち上げられた貝には和歌山県で初めて記録された種類もいくつかあった。また、紀伊半島が分布北限として知られている種類も多量で確認できた。

台風で初漂着の種類多数

この7~8月の連続の台風で打ち上げられた貝殻の中に、これまで発見されていなかった種類が見つかった。そのうち、今回は4種を、大きな貝殻から順に挙げると、幼児のこぶし大のタツマキサザエ、それより少し小さいマンジュウガイ、数センチのキナレイシとヒメホシタカラガイである。いずれもごく少数だけの発見である。残念ながら、この貝殻も、死亡後に時間がかなりたって

いるせいで、表面の光沢は消え、貝殻の一部は破損していた。

岩礁と砂浜が交互し、転石が多く、季節によっては海藻が繁茂するなど、さまざまな住み場所が北浜から塔島、そして円月島にまわって、番所崎の方々にある。多種多様な貝類が住める海岸なのだ。1周するだけで最低数十種、多い時は数百種が葉に集められる。番所崎一帯には、普通に生息しているのに貝殻が1個も見つからない種もある。潮上帯に生息するイボタマキがその代表種である。その貝殻

「生きている化石」オウ

「生きている化石」オウ

「生きている化石」オウ

「生きている化石」オウ

「生きている化石」オウ

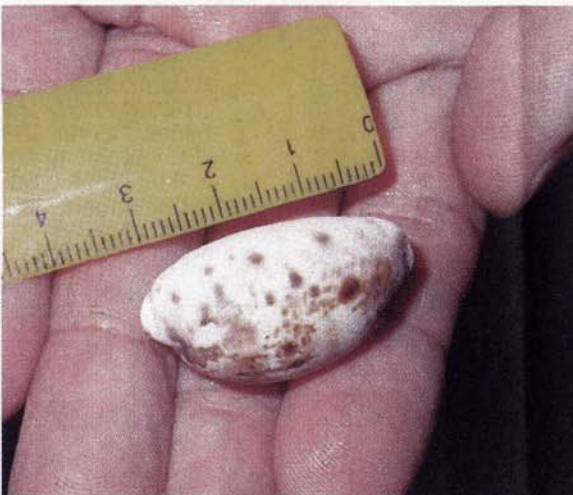
「生きている化石」オウ



タツマキサザエは新鮮だと模様と光沢が美しい。ヤコウガイに近縁で重厚なふたがあり、伊豆半島以南に分布する



キナレイシは、他の貝に孔をあけて肉を食べるイボニシより大きく、レイシガイの殻の突起を鋭くし、殻を黄色に染めた形。伊豆諸島以南に分布



口の周囲の模様がホシタカラガイに似ているヒメホシタカラガイ。紀伊半島が北限



マンジュウガイは四国以南に分布するので北限記録となる

延長300ほどの北浜という小さなエリアに、これほどの多くの種類の貝類が打ち上がるのは、全国的にも珍しく、まさにタイトル「宝の海」にふさわしい。

死んだ貝殻なので、気楽に出現種を網羅収集できる。うまく割れたものだと内部構造までわかる。何よりも、それぞれ種の一生に思いをはせることができる。それぞれの個体が、親貝からどこでどのように生まれ、どれくらいの間に成長してどれくらいの間に成熟し、子孫をつくらせて死んでゆくか。いわゆる衣食住を明らかにした個々の生活史を窮め、種の存続が可能かどうかを確かめてゆくことが、生物学では最も大切で基礎的なことなのである。だが、とっかかりやすく究明しづらい海洋生物の生物学的性質のため、このような知見がまだほとんどない種類ばかりのままだ。